

やくしまに 暮らして

ネイチャーガイド

大野 睦

第十六章 由来



■生物の名前

植物の名前を調べるとき、花や実の季節、葉や花の色や形状など、様々な視点からキーワードを探したり、既に自分の知っている植物に似ているところを探したりすることが多い。しかしながら、私はガイドの仕事をしていながら植物の分類は非常に苦手である。つまりは生物学的に、分類学的に、などと言った学問的な視野がどうやら苦手なのである。という言い訳を前提にするのも卑怯かもしれないが、それでも、その植物の名前の由来が明確であるものや、正に名は体を表しているものや日本の文化に関わりのある植物はゲストに対して説明もしやすい上、馴染みやすいために覚えてもらえることが

多い。また私自身が納得して説明しているので、解かりやすく印象に残りやすいのかもしれない。

■名前の由来

図鑑などに載っている名前とは違うが、同じ植物のことをさす場合がある。それが地域ごとにある呼び名、方言名である。方言名にはその地域独自の風習や、気候などが背景にあるため、その名前からその地域での暮らしが見えてくる。

写真はシキミ。日本の文化にとっても関わりのある植物で、仏事によく用いられる。このシキミにも、もちろん別称はいろいろあるのだが、最も肝心な名前の由来をひとつ例に挙げておきたい。名前の由来もいくつかの説があるが、私がいつも紹介しているのが、「悪しき実」。シキミの特性を最も表している「悪」が抜けてしまっており、最も有力な説ではないのかもしれないが、あえてこの説を紹介しているのは、シキミは花や実だけでなく葉も枝も根も全て有毒であるため。そして、その象徴的な実は植物で唯一の劇物に指定されているのである。ことを説明するためである。しかしながら、このシキミ、前述の通り古くから仏事に用いられており、よく知られた植物なのである。コウノキとも呼ばれているのは日本特有の香木であるとされているからとの説である。これだけの強い毒性がありながら、日本の文化において、古く

から活用されているのは、むしろその毒性を活かした使用方法であると思われる。納棺の際にシキミの葉を敷くことで消臭効果があり、仏壇の花瓶に枝を入れることで、水の腐敗を防ぐ効果があり、また墓に供えることで、獣から荒らされるのを防いでいたとも言われている。このシキミ。屋久島では最も多くの登山者が訪れる森に、手の届くところに自生している。なんでも危険なものは排除・隔離するのが当たり前のように言われる今の日本社会において、机上だけでなく、自然を通じて文化を伝えていくことがどれだけ貴重な機会になってしまっているのかを私はいつもシキミの前で話している。ちなみにシキミとハッカクは分類上では近縁とのこと。確かに実は少し似ているのが、シキミは劇物、ハッカクには毒性がない。薬と毒は紙一重なのである。



■地域における呼び名

魚のように成長の過程において呼び名が変わるもの。大きさによって呼び名が変わるもの。そして、その地域ならではの呼び名。これらについては、その由来がとても明確であることが多く、また人々の暮らしとの関わりが見えてくる。

この写真はサクラツツジ。淡いピンクの花はサクラの花と同じ色をしていて、屋久島では4月のはじめにヤマザクラが咲く。山肌には常緑の濃い緑と新緑の鮮やかな緑や黄色の中に、ヤマザクラのピンクが彩りを添える。サクラが終わり、芽吹きがしっかりとしてきたころ、今度はこのサクラツツジが山々の中を縫うように流れる川のほとりに咲き始める。その情景を楽しむように屋久島ではサクラツツジのことをカワザクラと呼ぶ。山や海、川をいつも見ているか

ら見えてくる景色であり、風や温度、湿度、目に見える色、新緑の匂い、全てを感じて生きてきた屋久島の人々の暮らしを、このような視点からも学ぶことが出来る。

まもなく梅雨入りをするであろう屋久島。雨が多い地域であるため、雨でも平気かと思われがちだが、梅雨は本当に辛い。夜に気温が下がらないため湿度があがり、羽アリが発生する。ちなみにこの時期の羽アリのことを流し虫と呼ぶ。新緑をうながす春の雨のことを木の芽流しと呼ぶが、こちらも雨が多い屋久島ならではの表現なのかもしれない。

大野 睦 BLOG やくしまに暮らして
<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

